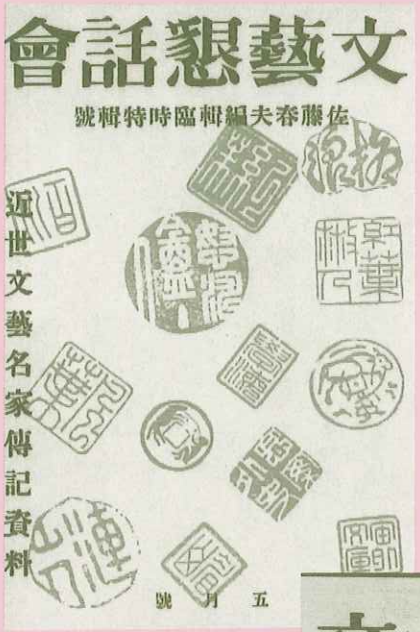
文芸懇話会

復刻版

文壇・文学者のファシズム統合への道を拓いた官民合同の文学団体＝文芸懇話会の機関誌を完全復刻。
国家の文化政策とそれに対峙する姿勢を求められた知識人とのせめぎ合いを明らかにする、
近代文学史・思想史・ファシズム史研究に必須の文献！
編集担当（交替制）＝川端康成・菊池寛・室生犀星・吉川英治・徳田秋声・島崎藤村・佐藤春夫ほか

《文芸懇話会機関誌》



全二巻・別冊一
一九三六年一月～一九三七年六月
A5判 上製 総一五一六ページ
揃定価＝五三、〇〇〇円（本体揃価格）＋税

不二出版

復刻の辞――文学の国家統合への道を掃き清めた文芸懇話会

本誌は、官民合同の文学団体・文芸懇話会の機関誌である。文芸懇話会は、一九三四年三月、内務省警保局長松本学が文化統制を目的として、直木三十五ら文学者のファッショ運動を抱え込んで創立した文学団体である。松本は、小林多喜二虐殺などをはじめとする共産主義運動の徹底的な弾圧・壊滅に辣腕をふるった人物であり、「日本文化の擁護者」を任じ、文学者を抱き込むことで思想取締・思想善導の方策としての日本精神主義の運動を鼓舞することを意図して思想対策を展開していった。

ファッショ系の作家・大衆文学作家だけでなく、「自由主義者」である多数の作家を取り込み、ついには大物作家である島崎藤村・徳田秋声などをも会員として同会は発足した。プロレタリア文学への弾圧以後、文学者の間にはファッショ的文化政策への反感が満ち、七月には反ファシズムを標榜した学芸自由連盟が結成されている。この連盟の中心的「自由主義者」を吸収し実体をなくしていくことも、同会の果たした役割のひとつだった。

文学者の側にも国家による文化の保護・発展（文学賞の授与、帝国文芸院の設置、著作権の保護など）の要求があったという側面もあるが、むしろ文化の擁護の名をかりた言論・思想統制になるのではという危惧が発足当初からあった。たとえば、徳田秋声は今さら政府に保護してくれると言われても信用できない、ほうっておいてもらいたい、と言い、広津和郎は覚書の「文芸団体、思想団体統制」など成り立つまいと指摘した。第一回文芸懇話会賞決定にあたり、審査委員会で島木健作の受賞を満場一致で決定していたにもかかわらず、松本の「左翼のシンパの作品は選に入れぬ」という反対により覆され、佐藤春夫の脱会騒ぎもおきた。が、あくまで主導権は内務省の側にあり、なし崩し的に無自覚のまま、当時の文壇の主だった作家たちが集合し、国の文化政策に「理解」を示していったことは、結局は国家による文壇統合の道を開いていくことに繋がった。三七年七月、同会は解散、新日本文化の会に再編成される。

同会の機関誌『文芸懇話会』は、三六年一月に会の動きをはっきりと伝えるため、創刊された。

上司小剣・岸田国士・三上於菟吉・近松秋江・川端康成・菊池寛・中村武羅夫・白井喬二・室生犀星・吉川英治・加藤武雄・横光利一・徳田秋声・広津和郎・宇野浩二・島崎藤村・佐藤春夫が順次編集を担当し、解散の前の月まで一八冊を発行した。

文壇の戦争統合を期す国家の文化政策とそれに揺れる文学者の動向を窺う恰好の資料として貴重な本誌を全号復刻し、六〇年後の現在に問うものである。

推薦の言葉〈五十音順〉

ファシズム転換期の文化政策研究に必須の資料

海野福寿――明治大学教授

十数年前のことだが「一九三〇年代の文芸統制――松本学と文芸懇話会――」（『駿台史学』五二号）という小論を書いたことがある。文学の門外からだが、ファシズムへの曲り角で知識人がどんな態度をとったかという関心からであった。そのとき使った資料の一つが機関誌『文芸懇話会』である。

文芸懇話会は一九三四年三月に発足した文学団体である。設立をリードしたのは内務省警保局長松本学だった。彼は右手で治安維持法による弾圧の鉄槌を振るいつつ、左手で文学者の抱き込みを図ったのである。

文芸懇話会は一九三七年七月解散し、新日本文化の会に再編成される。したがって会の活動期間は三年余にすぎないが、文化人動員の先鞭をつけた意義は大きかった。このような見方に対し、会に参加した自由主義的文学者たちは、松本の文芸統制の意図を空洞化させたと評価する向きもある。しかし、国会図書館憲政資料室所蔵の「松本学関係文書」にある彼の日記をめくると、動揺しつつある文学者が次々と彼の手に引き寄せられていく様子を探ることができる。やはり文芸懇話会はファッショ的文化統制に加担したと見るべきであろう。

『文芸懇話会』復刻を契機に関連資料が公開され、ファシズム転換期の文化政策と知識人のあり方についての論議が深められることを期待してやまない。

「知識人論」への視点

榎本隆司――早稲田大学教授

スペイン人民戦線事件やナチの焚書事件など、世界的にファッシズムの嵐が吹き荒れていた時代である。そして日本もまた「満洲事変」「上海事変」を機に、いわゆる十五年戦争への道に踏み込みつつあった。危機の状況に処すべく、リベラリスト徳田秋声をキャップに三木清らの学芸自由同盟が結成されたのは一九三三（昭和八）年七月のことだが、その頃、ファッショ作家を自認する直木三十五は、内務省警保局長松本学と通じていた。陸軍の中枢に在った将校たちと結んで五日会（昭和七年）に拠り、ファッショ文学を提唱した、その延長線上でのことである。

松本の企図するところが、教育統制や宗教統制につぐ文芸統制にあったことは明らかである。直木はまた、大衆文学陣営による文壇のヘゲモニー獲得を狙っていたのだが、秋声をはじめ、島崎藤村・上司小剣ほかの純文学作家を迎え入れたことで、松本の文芸院構想ともども出鼻を挫かれた観がある。「懇話会」として推移することになったゆえんである。

『人民文庫』がその「排撃」をスローガンに旗上げしたように、「官民合同」ということで会への批判は強かった。しかしその者たちまでがやがて誌上に名を連ねることにもなる「文芸懇話会」の実態は、思想・言論の自由を守るに難しかった時代の知識人の姿を究めるのに看過できない。岸田国士の憂国の思い、「伏魔殿」だと騒いで脱会した佐藤春夫の去就、そして広津和郎・川端康成らの言説等々、今日にも及ぶ「知識人論」への視座にかかわって興味を呼び、問題を投げかけているのである。

関連図書のご案内

武田麟太郎＝主宰

人民文庫《復刻版》《全26冊・別冊1》

○昭和11年～昭和13年刊
○別冊＝解説（小田切秀雄）・総目次・索引
○菊判・B6判・並製・総5、034頁
○揃定価180、000円＋税《別冊のみ分売可＝1、000円＋税》

二・二六事件のまさに一〇日前に創刊された本誌は、内務省の後押しで文芸統制のために結成された文芸懇話会や一部にファッショ的傾向のある『日本浪漫派』などの文学の体制内化を厳しく糾弾し、被抑圧階級＝庶民に文学の起点を求めた。反ファシズム・人民文学志向の文学雑誌として、苦悩する若い左翼文学者たちの戦前最後の砦となった本誌が、文学史上・近代史上に占める位置は重要である。

●推薦＝池田浩士・小田実・長谷川啓・水上勉

日本学芸新聞社＝刊

日本学芸新聞《復刻版》《全3巻・別冊1》

○昭和10年～昭和18年刊
○別冊＝解説（香内信子・香内三郎）・跋（遠藤斌）・総目次・索引
○付録＝文芸思想講演集（昭和12年10月刊）
○B4判・上製・函入・総1、104頁
○揃定価65、000円＋税《別冊のみ分売可＝2、000円＋税》

文芸批評紙である本紙は、戦前戦後を通じて活躍した主要作家・評論家が多く執筆しており、昭和一〇年代の文壇の状況をあざやかに映し出している。言論統制下にあって、文学・芸術の自由を訴えた数少ないジャーナリズムであったが、昭和一七年八月より、日本文学報国会の機関紙としての役割を果たすことになり、やがてそれは『文学報国』へと引き継がれる。

日本文学報国会＝刊

文学報国《復刻版》

○昭和18年～昭和20年刊
○解題（山内祥史）・解説（高橋新太郎）・総目次・索引付き
○A3判・上製・函入・総160頁
○定価18、000円＋税

本紙は、太平洋戦争下に、国策の周知徹底と宣伝普及のため情報局の指導により発足した日本文学報国会の機関紙である。その後期に同じ役割を果たした日本文芸中央会の機関紙『日本学芸新聞』の後継紙でもある。言論の自由を完全に奪い去った後の文化統制下の知識人・文化人の状況を明らかにし、帝国主義戦争と文学とアジアの問題を考える重要な材料として復刻するものである。

文藝懇話會は、思想團體でもなければ、社交倶樂部でもない。忠實且つ熱心に、日本帝國の文化を文藝の方面から進めて行かうとする一團である。

これを船にたとへるならば、軍艦でもなければ、遊覽船でもない。さりとて、商船でもない。目に見えぬ金銀財寶を滿載して、この國の民衆に寄せようとする寶船でありたいと思ふ。

この寶船には、七福神を載せてゐないが、二十人前後の會員が乘つてゐる。會員の文藝上における思想、氣質、傾向は、もとより個々別々のもので、何等の拘束をその上に加へんとするものでないのは、いふまでもない。太陽を中心として、それをめぐる惑星、或は惑星に伴なふ衛星、その他小さな星屑に至るまで、いづれも個々別々の働きをもつてゐるが、太陽系といふ大きな力の下に運動することに變りはない。そこに一種の不自然でない統一がある。拘束でない節制がある。もし大日本帝國を一つの太陽系としてみるとき、よしや小さな星屑であらうとも、それに應じた働きをして、文化の光り、文藝の輝きを、更らに美しく高めて行かなければならぬ。それに反對するものは決してない筈である。

文化の寶船に、文藝の珠玉を載せて、順風に金襴の帆を孕ませて行く。それが文藝懇話會の使命でありたい。楫を取るもの、艪を操るものには、もとより個々の力の働きがあるであらう。しかし、進み行くべき針路は定まつてゐる。

今度この『文藝懇話會』といふ小さな雜誌を出すに就いても、一つは會の力を一そう強く働かせ、會の動きを更らにはつきりとさせたいといふ趣旨から出たものである。この會がこれまでやつて來た

文芸懇話会《概要》

全二巻・別冊一

一九三六年一月～一九三七年六月
〈全二八冊を二巻に合本し、新たに別冊を付す〉

別冊＝解説〈高橋新太郎〉・総目次・索引
〈別冊のみ分売可＝一、〇〇〇円（本体価格）＋税〉

推薦＝海野福寿・榎本隆司

体裁＝A5判 上製 総一五一六ページ
揃定価＝五三、〇〇〇円（本体揃価格）＋税

一九九七年六月一括刊行！

不二出版
〒113 東京都文京区向丘1・2・12
電話〈03〉3812・4433
ファクシミリ〈03〉3812・4464
振替00160・2・94084

●本カタログ中の表示価格は全て本体価格です。
●弊社は注文制です。お近くの書店にご注文ください。

1997・4